

子どもと(7)

十月・青空を仰いで

清水 光子

「何て青い空！」園庭に出て仰いだ空のあまりにも青いのには、年甲斐もなく大声を出してしまった。外靴にはきかえていた子ども達がつられたように空を仰ぐ。都会のまん中の区切られた空でも、まっ青に、深い広がりさえ感じられる。東京オリンピック開会の日のあの青空を思い出す。

そして、何にも増してこの空と一体になった巨樹へのおもいを謳うたわれている倉橋惣三先生の「育ての心」の中の「十月」を繰り返し思い出す。

「秋は園の（お茶の水女子大学附属幼稚園）丘の大銀杏樹のてっぺんから来る。」という書き出しから、ぎんなんの丸い実が一日一日色づき、ある夜の風に落ちる、しかし限りないときえ思われるなお残る数、やがてその葉の色が次第に黄色色になってゆく様子を簡潔

にしかも美しく描いておられる。私も十数年、朝夕仰いだ樹なので、一人思い深いのであるが、巨樹を讃えるその謳の「朝日を迎えて輝く光、夕日に映えて照る光を思わずとも、澄みきった碧空に、燦として聳立している真昼の雄姿の神々しいことよ。私たちはその樹の下に子どもらといっしょにいて、偉いなるものの中にいる小さきものの心を、寸差を捨てた虔しさに感じさせられるのである。有難いことは仰ぐものをもつことである。」という結び。私はこれをほとんどそらんじていて、くちずさむ毎に胸にひびく感動を抑えることができない。

今年の春早く、ぶなの、樹齢数百年の大木をその原生林に訪れ、霧のような、霞のようなやわらかい、うす緑色のベールの中の稚い葉のささやきをきいた。おなじ林に夏、六月訪れた。夜明けで、うす紫の光の中で大木の若葉が生命の力をわき立たせているようなざわめきをきいた。そして感動で身ぶるいしたが、十月の今、あの巨樹はどんな姿だろうかと思う。きつと、堂々と輝かしく、あらかた黄葉した葉に装われ、静かに雪に静もる日を待っているのだろうか。こうして私たちは偉いなるものからの贈り物を一ばいに享けて十月を迎える。ドングリ、椎の実、栗、栃の実など。それぞれの命を次の世代に伝えているのだ。それにしても碧空にはえる柿の実の何という見事な配色だろう！

野の川は冷たさを増しながら、とり入れのすんだ田のふちを空をうつしながら、青い海に吸われる。

土曜日曜祭日というと決まって朝早く行進曲が町を流れてきこえてくるのも十月であ

る。「ただ今、マイクの試験中、本日は晴天なり」などとも。あれは今もおなじなのかしら、など面白く思い、青空のもとでの運動会、体育祭に声援を遠く送るのである。

戦後間もない頃、或る地方都市で私が子ども達と経験した運動会を思い出すと、今でも快い感動を覚える。小学校の運動会であるけれど、町をあげてのお祭りという雰囲気、農家の多いその土地でもその日ばかりは年よりから若い人達まで、もちろん幼い人達も、早くからグラウンドのまわりの少し枯れかけた草の上にむしろを敷き、その上に重箱につめたおべんとうを持ちこんで、子や孫や、隣の○ちゃん達に声援を送り、お昼には楽しい、青空のもとでのパーティである。○ちゃんのおばあちゃんに貰った大きなおはぎのおいしかったことが忘れられない、と私の次男は大学生の頃言った。

このようなことが教育上是非かをあげつらうのはさておき、学校・園の行事は地域との関わりを大切に、地域らしさを大いに盛りこんでやりたいものと、そして、地方文化を残すような方向へのきっかけにしたらいいな、と私は思っている。何しろ、楽しい行事がいい。それは知識として教えられたものより、思い出として心の中に深くしみこむからだ。子ども達の人間性の善なる部分に深く関わるのではないか、小柄なUちゃんがリレーに出た。走って、一人抜いたらころんで、すりむき、血を流しながらも懸命に起きて走ってバトンタッチした。その姿、まわりの声援。私の大人の目、耳の底にも今でもはつきり残っている。

元、高校の体育の教諭だった星野富弘さんは体育の指導中、思わぬ事故で首から上以外

のあらゆる感覚を失い、車椅子の生活を十数年続けられている。氏が口で絵と字を練習してつくられた『四季抄・風の旅』という詩画集をこの一月、第七四刷目を出された。その中の「きんもくせい」の絵に添えられた詩。

冬服に着替えた日

ほのかなやさしさが

私をつつんだ

それは樟脳のおいだった

運動会を見に来てくれた母の

装った母の

きものの裾すそのおいだった。

園外保育や遠足は、十月の子ども達にとってどんなにか楽しいことであると思うのだけど。嬉しくてその前夜は眠れない、というのは昔の子どもだけだ、というささやきがきこえて愕然とする。が、大体の子ども達は新しい経験の期待に胸をふくらませると思うし、それを裏切ることのないような大人の配慮が充分であるようにと願わずにいられない。天候ばかりはどうしようもないけれど、そのために何等かの事故が起きたとしたら？ と心配症の老婆はさがりがなく案じてしまう。ほんの小さなことが子どもものに心に大きな傷をつけ

ないように、事前踏査、下見研究、準備を細心緻密に、そして、子どもとは青空のように大らかに、と。大へんむずかしいことだけれど……。下見のときはたしかにあった公園のトイレが、修理のため使えなかった、ということも経験した。臨機応変の処置も必要になる。大人の柔軟な対応が求められる。

そんな緊張した大人は、つい口やかましくなったり、こわい顔して叱ったりしてしまう。普段あんなにやさしい先生が？と子どもは戸惑うことだろう。何しろ目の届くところに統制して行動するということから動物園へ行って、子ざるが母ざるにしがみついて、あちこちしているのみにとれていたら、「Tくん、ぼんやりしないで歩くのよ」といわれた。ラッコの泳ぎがあまりうまいのと、水の上に出たときの大きな丸い目に魅せられて立ち止っていたら「M子ちゃん、前があいてるよ」と声が飛んでくる。

遠足はいいけど、あとできっと絵を描かされるから行きたくない、と絵が苦手のN君が言ったという。芋掘りで、虫が好きなYちゃん、土の中の虫を懸命に探していたら「Yちゃん、君、何してるの。早く、大きなお芋沢山掘ってよ」これは叱られたのではないけれど、Yちゃんは心満たされたかな？と思う。

保育の中の行事の位置づけなどさまざま研究されているようであるが、いつか、本田和子先生が、「保育の流れの中で或るエポックメイキングな意味もあるのではないか」と言われて、鈍い私の心は眼をさまされた思いが出がした。お遊戯会を機として表現力が高まった、園外保育で、自立ができるようになった等々プラスの面が語られるけれど、一方マイ

ナスの面もあるのではないか、一人ひとりの子どもの心にとって、と疑い深い私である。急に昨夜は冷えた、という山の宿で、起きてみたらぐっと紅葉の色が鮮やかに山を被っていたという経験もある。一とき一ときの保育の、環境のつみ重ねが精巧な織物よりもっともっと精巧な子どもの心につくるひだの多い美しい綾錦を思うとき、何かにひれ伏したい気持ちになってしまうのである。

瘦馬の あはれ機嫌や 秋高し

村上鬼城

青い空のもと、外へ出よう。十月の清々しい空気の中を！ というので、戦後間もない頃、幼稚園児の末子と上の小学生の子どもらと小ハイキングをしたとき、短い秋の日が落ちかかり、私は早く帰らねば、と気がせて効外電車の駅までを叱咤激励して歩かせていた原っぱの中の道で、「もう歩けないよ！ 疲れたよ！」と座り込んでしまった末の子、「だめよ！ さあ、立って歩きなさい！ お兄ちゃん達もうあんなに先へ行ってるでしょ、さあ！」と言ったが、歩こうとしないでベソをかく彼にいらいらして腹を立てた私、「じゃあ、○ちゃんはここで野宿しなさい！」と言って歩きはじめた私を、彼は泣きながら追って来て、私の手につかまってやっと駅に辿りついたことがある、「野宿」ということばがどんな意味か、とにかく誰もいないところに置いてきぼりにされるといふ恐怖が彼を立ち歩かせたのだろう。以後、可成り長い間、いろいろな場面で野宿する、ということばが我家

のはやりことばになった。母親である私はそれをきく度に後悔しきり、はずかしさ一ぱいであった。

電車の中やパートの人ごみの中でなきわめいている幼児に手こずっている大人達を見ると、その関わりの人たちだけでなく、見ている大人達の表情や態度に興味をひかれる。近頃つきあひを持った若い両親は、パートで我子をわざと迷子にしてみるのだという。自立心を（未だ三歳の女の子）を鍛えるためという。本当に迷子にするのではないのだけれど、誰にでもすすめられることではないな、と思っけきた。

前記の星野富弘さんの、野菊のような白い小さな菊の花に添えた詩に

よろこびが集まったよりも

悲しみが集まった方が

しあわせに近いような気がする

強いものが集まったよりも

弱いものが集まった方が

真実に近いような気がする

しあわせが集まったよりも

ふしあわせが集まった方が

愛に近いような気がする

紅葉を尋ねて山歩きをしていたとき、オリテンテリングの若い一団にゆきあった。中の一人が、転んでくるぶしをくじいたと足を引きずり乍らも友達に支えられて必死で急いでいる。その人達に道をゆずるとき、同行の老齢の男性が叫んだ。「がんばれよ！ 二十一世紀は君たちにまかせるぞ！」

あんなおじいさんが作ったのかと

おもうなかれ 君らの声を歌にしたまで

(校歌という題で 土岐善麿)

老深く 覚えし言葉ベレストロイカ

若さらに明るき未来あれかし 遠藤千秋

(七月九日朝日歌壇より)

秋まったただ中、人も動植物もみのりのまったただ中、私老婆は若きものに、稚きものへ、心をこめてよき充実みのりをと心から祈るこの頃である。

(音羽幼稚園)